

GLA 随想 4 7つのプログラム (歴史の整備を除く)

GLA を憂う元会員

2013年4月6日 第1版

目次

1	はじめに	1
2	研鑽の充実	3
2.1	現状の方針案について	3
2.2	地域拠点で実施される研鑽について	4
2.3	条件とライフスタイルに応じた研鑽システムについて	5
3	人生同伴態勢の充実	6
3.1	現状の方針案について	6
3.2	身近で相談に乗ってもらえるお世話の態勢について	6
3.2.1	第1段階 5～6人程度のグループによるお世話	7
3.2.2	第2段階 お世話メンバーの拡充	7
3.2.3	第3段階 事務局との連携	8
3.3	円環的人生観に基づく魂の一貫したお世話について	8
3.3.1	今生におけるお世話について	8
3.3.2	来世に向けてのお世話について	9
4	通信ネットワーク環境の整備	12
4.1	現状の方針案について	12
4.2	映像配信システムの用途の検討	12
5	社会発信力の強化	14
5.1	現状の方針案について	14
5.2	システムが不備であるため生じている問題点	14
5.2.1	「GLAの教義」のページについて	14
5.2.2	用語の使い方について	16
5.2.3	英文ホームページ全般について	17
5.2.4	英文ホームページの「The Study of the Soul」のページについて	18
5.3	新たな方針案	20

5.3.1	「地域」に対する発信について	20
5.3.2	「社会」に対する発信について	20
5.3.3	「世界」に対する発信について	21
5.3.4	「発信してゆくためのシステム」について	22
6	拠点の充実	24
6.1	現状の方針案について	24
6.2	新たな方針案	24
6.2.1	研鑽・奉仕のフロントとしての機能について	24
6.2.2	お世話のフロントとしての機能について	25
6.2.3	伝道のフロントとしての機能について	26
7	「GLA 千年構想基金」の充実	28
7.1	現状の方針案について	28
7.2	新たな方針案	29
7.2.1	青年の育成基金の創設	29
7.2.2	遺骨をお預かりする事業	29
7.2.3	出版事業	30

1 はじめに

GLA 創立 40 周年記念事業「7つのプログラム」のうち、「歴史の整備」に関しては、既に「随想2」「随想3」のレポートにて私の考えを発表させていただきました。次は、残りのプログラムについて検討してゆきたいと思います。

但し、7つのプログラムの方針を検討するにあたっては、若干の障害が残っていることをご承知置き頂きたいと思います。7つのプログラムの方針を検討するにあたって、高橋佳子先生から頂いたヒントは極めて重要であり、私達が青写真にアクセスしてゆくためには、頂いたヒントの一言一句を慎重に吟味してゆく必要があるのではないのでしょうか。

しかし、私自身は「先生から頂いたヒント」を明確な形で拝見したことはありません。7つのプログラムに関する総合本部の方針案は、以前に GLA 誌の巻末に一覧表の形で掲載されていました。先生から頂いたヒントは、その一覧表に含まれているように見受けられますが、先生から頂いたヒントとそれ以外の部分とが明確に区別されておられません。

先生から頂いたヒントに対して、何か別の言葉を付け加えてしまうと、文章の意味が全く異なってしまうこともあります。従って、何も付け加えず、何も差し引いていない「先生から頂いたヒント」そのものの内容を確定にすることが、検討を始めるにあたって大切ではないのでしょうか。

本レポートでは、GLA 誌の巻末に掲載された一覧表の内容を検討し、「先生から頂いたヒント」が元々どのような内容であったのか、推測しながら考察を進めました。しかし、会員の皆様が方針を検討されるにあたっては、「推測」ではなく「事実」に基づいて検討を進めて頂きたいと思います。

そのためには、「先生から頂いたヒント」が元々どのような内容であったのか、全会員に開示されるよう、多くの会員の皆様が連名で総合本部に願い出て頂くことが必要ではないのでしょうか。

ところで、「先生から頂いたヒント」の取扱い方に問題があったことは、先生は当然ご存知であったはずですが。その問題を指摘して下さらなかった理由を考えてみますと、「弟子が自主的に動く」ということが呼びかけられているからではないのでしょうか。つまり、「現状の取扱い方で問題がない」と弟子が判

断するならば何も改める必要はなく、「問題がある」と判断するならば、改めればよろしいわけです。

上述しましたように、私は、現状の取扱い方には大きな問題があると考えますので、ぜひ改めて頂きたいと考えております。

2 研鑽の充実

2.1 現状の方針案について

「研鑽の充実」について、一覧表には、『会員お一人お一人の条件とライフスタイルに応じ、「魂の学」を体得できる研鑽システムを整える』という全体のテーマが示されています。おそらくこのテーマは、先生から提示して頂いた内容ではないかと推測します。

次に、「挑戦1.『GLA テキストブックシリーズ』に基づいた短期間で集中的に学べる研修の地域拠点（ターミナル及び映像反芻会場）での実施（基本ライフスタイル研修等）」について考えてみたいと思います。

「基本ライフスタイル」については、研修の必要性が今ひとつ感じられません。また、「基本ライフスタイル」以外のテーマについては、そもそもテキストブックがまだ発刊されておられませんので、研修を実施する前提を欠いています。従って、挑戦1の内容は先生から提示して頂いたものではないと考えます。ただ、気になりますことは、「短期間で集中的に学べる研修の地域拠点（ターミナル及び映像反芻会場）での実施」というかなり詳しい解説が含まれていることです。この解説部分は、おそらく先生が仰ったことではないでしょうか。

つまり、先生は『何か』に基づいた短期間で集中的に学べる研修の地域拠点（ターミナル及び映像反芻会場）での実施」というヒントを下さったのであり、その『何か』が『GLA テキストブックシリーズ』に置き換わってしまったものが、この「挑戦1」になってしまったのではないかと推測します。

次に、「挑戦2. 様々な生活条件・ライフスタイルに合わせた研鑽の開発」について考えてみたいと思います。これは、全体のテーマの内容を少し言葉を変えて繰り返しているように見え、具体的にどのような研鑽を開発すればよろしいのか見えてこないのではないのでしょうか。

従って、挑戦1, 2の内容については、見直す必要があるのではないかと考えられます。

2.2 地域拠点で実施される研鑽について

まず、「短期間で集中的に学べる研修の地域拠点（ターミナル及び映像反芻会場）での実施」というテーマの中の「地域拠点」について考えてみたいと思います。

現在でも、GGP などの研修は、本部で実施されるとともに、地域拠点にもその映像が配信され、地域拠点でも実施されています。従って、GGP などと同様の進め方で研修を実施する場合には、やはり本部で研修が実施されるとともに、地域拠点でも実施されることになるものと考えられます。従って、このような場合は、わざわざ「地域拠点」という言葉を入れる必要は無いものと思われま

す。「地域拠点」という言葉が入っているのは、「地域拠点でなければ実施できない」ということではないでしょうか。それは、「参加者の方々やお世話に携わる方々が膝を交えて実施される研修」であり、「取り組み、実践を主体とする研修」である、ということではないかと考えられます。そうしますと、「実践を主体とする止観シートの研修」ということ以外に思い当たるものはありません。

止観シートの研修については、既に八ヶ岳にて実施されています。しかし、八ヶ岳での研修は、「多くの皆様にとって居住地から遠い」、「宿泊を前提とする」、「募集人数がそれほど多くない」などの制約があるため、一人の方が頻繁に受講されることを前提としていないのではないのでしょうか。従って、最初に八ヶ岳にて研修を受けて頂いた後は、地域拠点にて実践を主体とする研修を積んで頂くことが予定されているのではないかと考えます。

具体的なカリキュラムは、八ヶ岳での研修のカリキュラムを参考にしつつ、「弟子が案を作成する」ということが呼びかけられているのではないのでしょうか。すなわち、最初に「カリキュラムの仮説」を立て、「先智慧・実行・後智慧」のサイクルを回して青写真に迫ってゆくことが呼びかけられているのではないかと考えます。

なお、上述しましたように、先生は「『何か』に基づいた短期間で集中的に学べる研修の地域拠点（ターミナル及び映像反芻会場）での実施」というヒントを下さったものと推測しますが、その『何か』とは、例えば『神理の基礎を

学べる教材』のようなお言葉ではなかったかと推測します。仮に、『神理の基礎を学べる教材』であれば、そのお言葉から『GLA テキストブックシリーズ』を連想することもできますし、『止観シート』を連想することもできます。

2.3 条件とライフスタイルに応じた研鑽システムについて

私は、「条件とライフスタイルに応じた研鑽システム」とは、様々な家庭問題や職場の問題等に焦点を合わせた「テーマ別研修」と上述の「止観シート研修」を合わせたものではないかと考えます。「テーマ別研修」研修のテーマは、例えば「子供の登校拒否」「嫁姑問題」「職場の人間関係」などが考えられますが、会員の皆様の要望が多いものから選択して頂ければよろしいのではないのでしょうか。

テーマ別研修の内容は、関係する御指導映像の反芻、止観シートの分かち合い、如是我聞などになると思われます。テーマ別研修では、同じテーマを抱えた皆様が集うことによって、共に手を携えてテーマを超えてゆこうとする機運が芽生えてくるものと思われますし、そのテーマに絞った止観シートや如是我聞が分かち合われることも、参加者の皆様のニーズに合うのではないのでしょうか。

しかし、会員の皆様が抱えておられるテーマは様々異なるものの、果たして頂くべきことは「内を見つめ浄化すること」、「内と外をつなぐこと」に尽きるのであって、これらは止観シート研修で対応すべきことではないかと思われます。そうしますとしますと、何れのテーマ別研修も、その研修単独で問題の解決を目指すわけではなく、「テーマ別研修」と「止観シート研修」がセットになって問題の解決を果たしてゆくことが正しいのではないのでしょうか。

先生から頂いたと思われるテーマの末尾が「研鑽を整える」ではなく「研鑽システムを整える」となっている理由も、複数の研鑽がリンクして「研鑽システム」を構成するという意味ではないかと思われます。

3 人生同伴態勢の充実

3.1 現状の方針案について

「人生同伴態勢の充実」について、一覧表には、「誰もが困ったときに、「魂の学」に基づき、身近で相談に乗ってもらえるようなお世話の態勢をそれぞれの場に整える」、および「円環的人生観に基づく魂の一貫したお世話を充実する」という全体のテーマが示されています。おそらくこれらのテーマは、先生から提示して頂いた内容ではないかと推測します。

次に、「挑戦1. 神理を学ぶ専門家とも響働し、会員の皆様の解決困難な問題にも道をつけてゆく（トータルライフ・パートナーズシステム）。まずはモデル地域で開発し、それを全国に広げてゆく」について考えてみたいと思います。おそらくこの前段部分は先生から提示して頂いたことであると思いますが、後段部分の「まずはモデル地域で開発し、それを全国に広げてゆく」は、他の方が書き加えられたものであると考えます。

次に、『挑戦2. 聖地八ヶ岳いのちの里に、師と弟子の永遠の絆を伝承する「人生祈念館」の第1次着工』について考えてみたいと思います。この挑戦2の内容は、「円環的人生観に基づく魂の一貫したお世話を充実する」に対応するものであると考えられます。具体的には、人生祈念館には私達の認めた「人生記録」が永久保存されることを指していると思われませんが、それがどのようなお世話につながってゆくのか判然としません。おそらく、「挑戦2」の内容は先生から提示して頂いたものではないと考えられます。

3.2 身近で相談に乗ってもらえるお世話の態勢について

「GLA 随想1 幻の十年ヴィジョン」のレポートに認めさせて頂いたように、「人生同伴態勢の充実」というプログラムは、「グループ力・響働力に基づくお世話構造」を前提にしているものと考えます。そして、具体的な態勢については、例えば後述する第1～第3段階のヴィジョンを描くことができるのではないのでしょうか。

但し、私はGLAの「お世話の場」の実情というものをほとんど存じ上げて

おりませんので、このヴィジョンがどこまで妥当なものであるのかは解りません。何れにしても、智慧を尽くして「お世話の態勢」について仮説を立て、「先智慧・実行・後智慧」のサイクルを回して青写真に迫ってゆくことが呼びかけられているのではないかと考えます。

3.2.1 第1段階 5～6人程度のグループによるお世話

「GLA 随想1」のレポートに認めさせて頂いたように、2001年FCSでは地域別に班分けされたグループで行動を共にしつつ、「響働力・グループ力」の鍛錬に取り組みました。その際の私の記憶は曖昧なのですが、おそらくこの「グループ」は、5～6人程度の規模ではなかったかと思います。そうしますと、生活実践のグループと同等の規模になりますので、お世話の第1段階は「生活実践のグループ」に担って頂くことが正しいのではないのでしょうか。

生活実践に未参入の方でも、GGPに参入されている方であれば、プロジェクトの中でグループを形成して頂ければよろしいのではないのでしょうか。また、生活実践にもGGPにも参入されていない方については、最寄の生活実践のグループに同伴を担って頂くことがよろしいのではないかと思います。

具体的にどのような同伴をして頂くかという点についてですが、これは既に様々な生活実践のグループにて、困を抱えたメンバーに対する同伴が果たされているわけですから、これまでと同様に同伴を果たして頂ければよろしいのではないかと思います。

3.2.2 第2段階 お世話メンバーの拡充

第1段階のお世話で道が付かなかった場合には、第2段階のお世話に移行することになります。第2段階では、第1段階のグループメンバーに加えて、数名程度のベテラン会員に参加して頂くのがよろしいのではないのでしょうか。

その中には、地域のお世話人の方を必ず一名は含めて頂くことが必要ではないかと思われまます。それは、次の第3段階に移行する必要があるのかどうか早期に見極めて頂くとともに、移行する必要がある場合にはスムーズに事を進めるためです。

3.2.3 第3段階 事務局との連携

第2段階のお世話で道が付かなかった場合には、第3段階のお世話に移行することになります。これは、担当のお世話人から所属本部の事務局に打診して頂き、GLA 共同体全体の力を以って様々な形の支援をして頂くこととなります。

まず、困を抱えた方（縁友）が、過去にもお世話を受けられた場合には、どのようなお世話を受けられたかという情報が有用であると思います。また、縁友の方が過去に取り組みされた様々なシート類なども、その方の想念の傾向を知る上で有用な情報ではないかと思います。これらの個人情報、事務局が必要と認める場合は、ご本人の承諾を頂いた上で、お世話人を介してお世話メンバーの方々に提供して頂くことが一つの可能性として考えられます。

神理を学ぶ専門家の支援が必要であるのか否かも、所属本部の事務局にて判断して頂くことが妥当ではないでしょうか。支援が必要であると判断された場合には、所属本部の事務局からTL総合事務局に対して支援要請をして頂き、TL総合事務局では、その要請に応じて、派遣する専門家の人選をして頂くこととなります。

3.3 円環的人生観に基づく魂の一貫したお世話について

次に、「円環的人生観に基づく魂の一貫したお世話を充実する」というテーマに対応する挑戦の内容を検討したいと思いますが、「円環的人生観に基づく魂の一貫したお世話」とは、「今生の魂のお世話」と「来世の魂のお世話」という二つの意味が含まれているのではないのでしょうか。そこで、それぞれの意味について考えてみたいと思います。

3.3.1 今生におけるお世話について

「今生の人生」ということについて考えてみますと、例えば一人の方の青年期に訪れた試練と、壮年期に訪れた試練とが共通したテーマで繋がっている場合が多々見受けられます。しかし、壮年期のその方をお世話するメンバーは、その方の青年期のことを知らない場合が多いと思われるので、共通したテー

マを見落としてしまう場合があるのではないのでしょうか。

今生の人生について「一貫したお世話」を充実してゆくためには、お一人お一人の「お世話の記録」を必ず保存して、後年に参照できるようにすることが必要ではないのでしょうか。ただ、実際にお世話の記録を参照するという事は、個人情報に触れるわけですから、直接的には職員の方々のみに担って頂き、職員以外の方に開示する場合には、ご本人の承諾を条件とすべきではないかと考えます。

3.3.2 来世に向けてのお世話について

上述しました「お世話の記録」は、今生の人生のみならず、来世においても貴重な資料として役立つものではないのでしょうか。また、来世のことを考えますときに、ご本人が認める「人生記録」も大きな意義があるのではないかと考えます。

私達の魂は、現象界に転生することにより、「三つのち」を受け入れ、「心」を形成してゆきます。私達が自らの魂の実相に迫ろうとするとき、その手がかりになるのは「心」と「三つのち」ではないのでしょうか。今生の人生で受け入れた「三つのち」と今生の人生で形成してきた「心」について、私達はある程度詳細に振り返ることができます。しかし、今生の数十年の人生で経験できることは限られており、今生の体験のみから魂の実相の全体像に迫ってゆくことは困難な面があるのではないのでしょうか。

私達が過去世において如何なる「三つのち」を受け入れ、如何なる「心」を形成してきたのか、その記憶を呼び覚ますことができれば、私達は自らの魂の実相により深く迫ってゆくことができるのではないかと思います。私達は、時に「魂の所以に遡る瞑想」などによって過去世の事を思い出させて頂くことがあります。

しかし、私自身の経験から申しますと、過去世について直接的に思い出せる事は断片的な事であり、過去世の一転生の内容を「詳細に、はっきりと」思い出したことはありません。過去世の事を思い出された経験がある皆様も、おそらく同じような状態の方が多いのではないかと推察します。

ここで、直接的に思い出した事を手がかりとして、過去世の自分自身の伝

記、自叙伝または日記などの情報にたどりつく事ができれば、過去世の人生の全体像が明らかになり、これによって自らの魂の実相により深く迫ってゆくことができるのではないのでしょうか。故・叶内立郎氏も、過去世に認めておられた日記にたどりつくことができ、その事がご自身の見取りを進めてゆかれるにあたって大きな糧になった事が思い出されます。

しかし、過去世の伝記、自叙伝または日記などの情報が今日まで残っている方は、ごく一部の方に過ぎず、大部分の方々にとって過去世の詳細な記録というものは残っていません。その事は、私達が自らの魂の実相に迫ってゆこうとするとき制約になってしまいますが、現に残っていない以上、如何ともし難いのではないのでしょうか。

ここまで申し上げましたなら、私達が今生に認めさせて頂く「人生記録」が如何なる意義を有しているのか、御理解頂けるのではないのでしょうか。「人生記録」は来世に自分自身が読むために認めさせて頂くものではないのでしょうか。私達が来世に今生の人生の事を思い出し、自らの「人生記録」にたどり着くことができたのであれば、それは自らの魂の実相に深く迫ってゆくために、極めて貴重な資料になるのではないのでしょうか。

なお、来世の私達が今生の人生のことを断片的に思い出したとしても、人生記録にたどり着くためには「氏名や会員番号などを思い出せるのかどうか」ということが問題になりそうです。しかし、人生記録の作成は、高橋佳子先生が薦めて下さっていることですから、おそらく何か手立てが予定されているのではないかと思います。

上述しましたように、人生記録は、「心」と「三つのち」を手がかりとして自らの魂の実相に深く迫ってゆくことを目的としています。従って、人生記録には、人生で起こったことを漠然と記載してゆくのではなく、「如何なる三つのちを引き受けてきたのか」、および「如何なる心を形成してきたのか」という点に重点を置いて記載してゆく必要があるのではないのでしょうか。また、今生の人生を振り返って後悔したことがあれば、小さなことであっても、それは来世に反映されてゆく可能性がありますので記載しておく必要性を感じます。

さらに、人生記録は、他人が読んでも解りやすい文章で書いて頂く必要があるものと思われます。人生記録は、来世の自分自身が読むために作成させて頂

くものですが、「来世の自分自身」はある意味では「他人」に近い存在であり、他人にとって解りにくい文章は、来世の自分自身にとっても解りにくい文章になってしまうのではないのでしょうか。

以上の点をまとめますと、人生記録を作成するにあたっては、特に以下の点を留意して頂く必要があるものと思われます。

- ・ 如何なる「三つのち」を引き受けてきたのかが明らかになっているか
- ・ 如何なる「心」を形成してきたのかが明らかになっているか
- ・ 後悔の内容が記載されているか
- ・ 他人が読んでも解りやすい文章で書かれているか

以上の留意点をご自身で充足できる方はそれでよろしいのですが、普段から文章を書き慣れていない方にとっては、留意点を充足するように文章を記載することが難しいかもしれません。そこで、ご本人が希望される場合は、同伴者にも人生記録に目を通して頂き、上述したような視点を提供するアドバイスをして頂けるようにすることが望ましいのではないかと思います。

4 通信ネットワーク環境の整備

4.1 現状の方針案について

通信ネットワーク環境の整備について、一覧表には「情報通信の環境を整備して、常に、先生と会員の皆様の絆が守られ、深まるようにする」というテーマが示されており、このテーマは、先生から提示して頂いたものと考えます。

現在掲げられております挑戦の内容は、「挑戦1. 先生の御映像を、地域拠点まで豊かに配信できる映像通信システムの整備」、「挑戦2. 地震などの天災が起こった時の会員サポートのためのシステム整備」、および「挑戦3. eメール等の活用による、共同体と会員の皆様のコミュニケーションシステムの拡充」です。これらの内容は先生が提示して下さったものであるかどうかは解りませんが、おそらく間違っていないのではないかと考えられます。

ここで、「通信ネットワーク環境の整備」については、既に個々の会員の自宅等に映像を配信できるシステムが構築されています。このシステムが構築された理由は、「新型インフルエンザの感染拡大などの理由により、学びの場そのものの開催が困難である場合に対処するため」ということです。しかし、そのような事態は何十年に一度という頻度でしか発生しないのではないかと考えられます。本当にそのために「のみ」多額の費用を投じる必要があったのか疑問に思われませんか。

実は、このシステムが構築された真の理由は別のところにあると思われるのです。高橋佳子先生は、真の理由を伏せられたまま、システムのみを構築されることにより、弟子が真の理由にアクセスできるよう、ヒントを与えて下さったのではないのでしょうか。従って、この映像配信システムの真の用途に係る挑戦の内容を新たに追加する必要性があるものと考えられます。

4.2 映像配信システムの用途の検討

会員の自宅への映像配信システムの用途を考えてゆくためには、全体のテーマが意味する内容について、改めて検討してゆくことが必要ではないでしょうか。

「情報通信の環境を整備して、常に、先生と会員の皆様の絆が守られ、深まるようにする」というテーマの中の「常に」とはどのような意味でしょうか。「常に」とは、「一日24時間、いつでも」という意味ではないかと考えられます。すると、「常に、先生と会員の皆様の絆が守られ、深まるようにする」とは、「一日24時間、いつでも、反芻用の御指導映像をオンデマンドで配信する」ということではないかと思われま

す。また、全体のテーマを果たしてゆく上で、もう一つ大切かと思われまことは、例えば、高齢者や病気の方など四聖日などの場に足を運んで頂くことが困難な方々に対する配慮です。四聖日の場では、車椅子で参加されている方々も数多くおられます。車椅子で参加して頂くためには、車椅子、介添者、移動手段（自動車）などをご自身で確保して頂く必要がありますが、なかなかハードルが高いのではないのでしょうか。

本来であれば、四聖日などの集いではその場を集って頂くことが原則ではありますが、止むを得ない事情がある場合には、自宅等への映像配信システムを活用して、自宅等にて集いに参加して頂けるようにすることが望ましいのではないかと考えられます。

5 社会発信力の強化

5.1 現状の方針案について

「社会発信力の強化」について、一覧表には、「より多くの方々に、先生、神理を理解し、生きていただくために、地域、社会、世界に広報していくためのシステムを整える」という全体のテーマが示されています。おそらくこのテーマは、先生から提示して頂いた内容ではないかと推測します。

ここで、「広報していくためのシステム」というお言葉の意味について考えてみますと、「広報の内容そのもの」を「システム」としてとらえているわけではなく、「広報の内容を産出するためのシステム」のような意味ではないかと考えられます。

すると、挑戦1～3として掲げられている「ホームページの充実」、「GLAを紹介するパンフレットの充実」、および「小講演会、映像放映の集い（仮称）の展開」は、何れも全体のテーマからは、若干外れているのではないかと考えます。例えば、仮にホームページに限って挑戦のテーマを掲げるとすると、「充実したホームページを産出するためのシステムを整える」という方向になるのではないかと考えます。

従って、挑戦1～3の内容については、見直す必要があるのではないかと考えられます。

5.2 システムが不備であるため生じている問題点

現状のGLAでは、上述したシステムが整っていないわけですが、そのことが社会発信の内容に如何なる影響を及ぼしているのか、GLAの一般向けホームページを参照しながら考えてみたいと思います。

5.2.1 「GLAの教義」のページについて

まず、ホームページ中の「GLAの教義」のページについて検討してみたいと思います。現状の「GLAの教義」のページの最大の問題点として私が考えておりますことは、そもそも何のためにこのページが存在するのか、目的、目

標が見えてこないということです。

GLA のホームページを作成するにあたっては、当然、ウィズダムを作成されたことと思いますし、そこにはホームページを作成する「願い」が明らかにされているはずで

す。ホームページを作成するにあたっての願いは、例えば「より多くの方々に神理を理解し、生きて頂きたい」ということではないかと考えられます。仮に、「願い」がその通りのものであったとしますと、ホームページ自体に掲載できる情報量は限られているわけですから、「高橋佳子先生の御著書をお読み頂く」、あるいは「GLA に入会して頂く」という行為に結びついてゆかない限り、願いを成就してゆくことは難しいということになります。

ホームページの読者の方々に実際にそのような行動を結んで頂くためには、「神理に感動して頂く」ということは欠かせないことであり、これがウィズダムの中で最重要な「目的」になるのではないのでしょうか。ホームページに掲載された情報が部分的なものであったとしても、読者の方々がそれに感動されたならば、より詳細な情報を自ら求めてゆかれるでしょう。一方、ホームページに感動されなければ、より詳細な情報に触れたいとは思われまいでしょう。

ホームページを構成する全てのページが必ずしも「神理に感動して頂く」ということを直接的な目的にしているわけではないと思いますが、「GLA の教義」のページは、神理に対する感動を引き起こすための中核になるページではないのでしょうか。

そのように考えますと、「GLA の教義」のページを作成するにあたっては、「このページを通じて神理の何に感動して頂きたいのか」という「目標」を明確にする必要があると思いますし、その上で、「目標」を実現してゆくストラクチャーのあり方を「方策」として初めて論じることができるように思えます。

現状の「GLA の教義」のページは、「感動が起きない」という以前に感動を引き起こそうとした工夫の跡がみられません。そうしますと、「願い」、「目的」、「目標」に関する上述の私の考えが誤っているのかもしれませんが。仮にそうであるとしても、「GLA の教義」のページを何度読み返しても「目的」、「目標」が見えてきませんので、本当にウィズダムに基づいてこのページを作成されたのかどうか、疑問に思います。

次に、「願い」、「目的」、「目標」に関する私の考えが正しいと仮定して、何を果たすべきかを考えてみたいと思います。

この場合、「読者の感動を引き起こす」ということは最重要な目的になりますが、この目的は相当にハードルの高いことであって、相応の智慧を育んでいなければ、そのようなストラクチャーの青写真に自らアクセスすることは困難ではないかと思われます。

では、先生は、困難なことを命じられたのでしょうか。そうではなく、そのまま使えるストラクチャーを用意して下さっているのではないのでしょうか。それは、「魂の学」エッセンスの中の「運命を変えよう」というページのことです。

このページでは「運命の原因を知る」、「運命の傾向を知る」、「運命は変えられる」、「新しい未来にこんにちは」という4つのステップによって運命を転換する方法が示されています。この内容は先生のご指示に基づくものであると思われます。

ここで、「運命の原因を知る」および「運命の傾向を知る」とは「偽我埋没」ということであり、「運命は変えられる」とは「善我確立」「菩提心発掘」ということであり、「新しい未来にこんにちは」とは「真我誕生」「大菩提心湧出」ということではないのでしょうか。従って、「GLAの教義」のページは、「運命を変えよう」のページを骨格として、さらに詳細な内容を肉付けしてゆくように構成してゆくことが呼びかけられているのではないかと思われます。

これにより、「本当に運命は変えられるのだ」という感動を引き起こすことができるのではないのでしょうか。

5.2.2 用語の使い方について

GLA ホームページを編集してゆくにあたって、「対象とする読者」は、社会一般の方々、すなわち「GLA、神理に対して何の予備知識も無いの方々」を想定すべきではないかと思われます。

しかし、GLA ホームページでは、「ビッグクロス」、「魂の所以に遡る瞑想」、「魂の対話」、あるいは「円環的人生観」のような言葉が何の説明もなく登場してきます。これらの言葉は、「GLA、神理に対して何の予備知識も無いの方々」に説明無しで理解して頂ける言葉ではないと思われます。

このような用語の問題を考えますときに、一昨年より様々な形で報道されております、福島第一原子力発電所の事故の報道のことを思い出します。事故の報道では、例えば「圧力容器が破損して燃料が格納容器に溜まっている」などの事実が伝えられました。

その際、どのテレビ番組でもそうでしたが、イラストや模型などを使って、「原子力発電所全体の構成はどうなっているのか」「圧力容器とはどのような物であるのか」「燃料とはどのような物であるのか」「格納容器とはどのような物であるのか」等の説明を果たした上で、「圧力容器が破損して燃料が格納容器に溜まっている」という事実を報道していました。

原子力発電に限らず、どの分野でもそうであると思うのですが、その分野の知識を持っている人に対しては「一言」で伝わる情報であっても、知識を持たない人に伝えるためには、何十倍、何百倍もの手間隙をかけなければならない場合があります。「社会発信」ということに多少なりとも知識を持っておられる方であれば、このような専門用語を使った情報発信のあり方については、「智慧を育む」という以前の常識として、身につけておられるのではないのでしょうか。

GLA 会員の中にも、その程度の常識を備えた方は多数おられると思うのですが、その方々が持っておられる力をホームページに活かすことができなかったことは、システムに不備があるからではないかと思わざるを得ません。

5.2.3 英文ホームページ全般について

GLA の英文ホームページに関しても大きな問題があるのではないかと思います。

最初に取り上げたい問題は、英文ホームページ全般に関することであり、「この英文ホームページをご覧になった方に何をして頂きたいのか」という「願い」が見えてこないことです。「GLA に入会して頂きたい」ということはなんとなく解らないでもないのですが、その後どのようにして学んで頂きたいのかということです。

「英文の月刊誌をお送りするので、英文の月刊誌で学んで頂きたい」ということであれば、その旨を明確にアナウンスすべきであると思いますし、「日本

語を習得して日本語の月刊誌で学んで頂きたい」ということであれば、「なぜそこまでの苦労を背負って頂きたいのか」という説明が必要ではないでしょうか。また、「元々日本語を習得されている方々のみを対象として考える」ということであれば、そもそも英文ホームページは不要になります。

5.2.4 英文ホームページの「The Study of the Soul」のページについて

英文ホームページについて次に取り上げたい問題は、The Study of the Soul (Teaching of GLA) のページのことです。このページの内容は、日本語の「GLA の教義」のページをそのまま翻訳したもののようであり、「菩提心発掘」ということに大きなウエイトが置かれています。一方、先生の英語版御著書として、最近「あなたが生まれてきた理由」と「魂の発見」が追加されましたが、これらを含め何れの御著書においても「菩提心発掘」について系統立てた説明が掲載されていません。

これでは、英文ホームページをご覧になった方が「菩提心発掘」について興味を持たれ英語版御著書を購入されたとしても、「菩提心発掘」についてほとんど何も解らないことになってしまいます。このように申し上げますと、「英文ホームページに菩提心発掘に関する詳細記事を追加すればよい」という考えが生じるかもしれませんが、その前に「菩提心発掘」という神理の性質について十分に吟味しておく必要性を感じます。

1992年にGLAが積極的な伝道を展開し始めた後、GLAは「求道心の高い修行者の共同体」から「一般大衆の共同体」へと徐々にすそ野を広げつつあり、現在はその途上にあります。GLA共同体が会員の皆様に推奨してきた「行」は、信次先生の時代より「煩惱を克服する」という点で一貫していたと思います。しかし、大衆化が進んでいきますと、「煩惱を克服せよと言われても、できない人はどうすれば良いのか」という問題が生じるのではないのでしょうか。

「菩提心発掘」は、その問題に対する解答ではなかったかと思います。煩惱を克服する事が難しい人は、とりあえずその問題を横に置いて構わないのであって、「書写、瞑想などによって菩提心を刻印してゆく」という歩みによって煩惱に立ち向かう準備が整ってくるのではないかと考えられます。「煩惱を克服する」というテーマを避けて通れるようになったことは、GLAの歴史の

中では、相当に大きな転換点であったと思います。

但し、煩惱に打ち克つ可能性を持っている方々については、その段階に留まることが非常に残念なことであると思います。「煩惱の受発色が現れようとするとき、それにストップをかけ、菩提心の受発色に変革してゆく」ということに挑戦し続けて頂かなければなりません。そして、実際に多くの会員の皆様は、そのような挑戦を果たされてきたのではないのでしょうか。

しかし、先生は、「煩惱の受発色を菩提心の受発色に変革してゆく」という点について、それほど強調してこられなかったのではないのでしょうか。少なくとも「菩提心の書写や瞑想だけでは意味が薄い。煩惱の受発色を変革して初めて大きな意味がある」という事を仰ったこともなかったと思います。もし、先生が「菩提心発掘」を「煩惱の受発色の変革」に強く結びつけてしまわれますと、これは「できない人にも道を付ける」という願いを没却することになりかねないと考えます。

そうしますと、「菩提心発掘」を「煩惱の受発色の変革」に結びつけているのは、先生ではなく会員の皆様であるということになるのではないのでしょうか。それは、以前の「善我確立」、「真我を解放する行」などの取り組みによって「受発色を変革する」という風土が GLA に定着しており、「先生が明言されていなくても、菩提心発掘とは、煩惱の受発色を菩提心の受発色に変革することである」という理解が自然に生まれたからではないのでしょうか。

以上のように考えますと、「菩提心発掘」という神理を前面に打ち出すためには、相当に場が成熟していなければならないこととなります。外国では GLA の場がほとんど育まれておらず、「これから世界伝道のヴィジョンを描こう」という段階です。「菩提心発掘」に関する上述の私の考えが正しいとすると、この段階で外国人の方々に対して「菩提心発掘」を前面に打ち出すということは、妥当なことではないものと考えます。

結論としては、日本語ホームページと同様に、「The Study of the Soul」のページは、「運命を変えよう」のページを骨格として、さらに詳細な内容を肉付けしてゆくように構成してゆくことが呼びかけられているのではないかと思います。但し、日本語ホームページとは異なり、「菩提心発掘」については触れないことが得策であると考えます。それならば、現在の英語版御著書によっ

て、さらなる詳細を学んで頂くことができます。

5.3 新たな方針案

5.3.1 「地域」に対する発信について

先生から頂いたテーマに「地域、社会、世界に広報していく」という語句が含まれているということは、「地域」「社会」「世界」のそれぞれに対して何を広報してゆくのか検討しなければならないという意味ではないかと考えます。そこで、まず「地域」について考えてみたいと思います。

地域に広報していくべき内容は、神理に関心を持たれた非会員の方々が、ターミナル等の地域拠点に気軽に来て頂けるような内容ではないでしょうか。例えば、GLA のホームページに、各ターミナルに関する次のような情報を掲載して頂くことが望ましいのではないかと思います。

- ・ ターミナルの所在地、地図および電話番号
- ・ そのターミナルのお世話人の方々のご挨拶
- ・ 非会員の方が参加できる集いの内容や、開催日時
- ・ 過去に開催された集いのレポート

上述しましたような情報は、「ぜひ GLA に集ってみたい」と積極的に思っておられる方々のためというよりは、むしろ「機会があれば、一度 GLA をのぞいてみてもいいかもしれない」という程度に思っておられる方々のためです。その方々に、実際に足を運んで頂くためには、上述しましたような情報に簡単にアクセスできるようにすることは大切であり、それが「より多くの方々に、先生、神理を理解し、生きていただく」ということにつながってゆくのではないのでしょうか。

5.3.2 「社会」に対する発信について

GLA のホームページを閲覧される非会員の方々は、それぞれ深い関心を持っておられるテーマがあると思います。それは例えば、「子供の登校拒否」、「職場の人間関係」など、お一人毎に全く異なるテーマになります。GLA がそれぞれのテーマに対して指針を提供するならば、多くの方々の注目を集めるこ

とができるのではないのでしょうか。

そこで、GLA のホームページに「テーマ別御指導・如是我聞集」を公開すると如何かと思われます。「テーマ別御指導・如是我聞集」では、様々なテーマ毎に専用のページが設けられ、そのページではそのテーマに沿った情報のみを提供されます。例えば、「登校拒否」のページでは、登校拒否に関して過去に先生がどのような御指導を下されたのか、また、会員の皆様がどのような如是我聞をされたのかという点に絞って情報が提供されることとなります。

この発信内容は、「研鑽の充実」における「テーマ別研修」と対を成しており、テーマ別研修が充実してゆけば、ホームページも充実してゆくことになります。また、この発信内容は、「神理を学びたい」というよりも、むしろ「自分の抱えている問題を解決したい」という意識をより強く持たれている方々のためです。その方々に入会して頂くためには、お一人お一人のニーズに即した情報を提供することが大切であり、それが「より多くの方々に、先生、神理を理解し、生きていただく」ということにつながってゆくのではないのでしょうか。

5.3.3 「世界」に対する発信について

「世界」に対する発信を検討するにあたっては、「世界伝道の青写真」にアクセスしていなければ難しい面があるのではないかと思われます。つまり、「世界伝道」と申しましても、様々な段階があるはずであり、各段階で「どのような方に集って頂き、何をして頂きたいのか」という事が異なってくるのではないのでしょうか。その点を把握していなければ、「世界」に対して何を発信してゆけばよろしいのか見えてこないのではないかと思います。

世界伝道を実現してゆくにあたっては、「外国語の月刊誌を発刊する」「同時通訳付きの GGP の映像を世界に発信する」「外国の拠点を創設する」などの方策が様々な考えられますが、これらは、やろうとすればそれほど難しいものではないと考えます。最も難しく、また時間がかかると思いますことは、「日本と外国のかけ橋になる人を育む」ということではないのでしょうか。

「日本と外国のかけ橋になる人」とは、「神理を理解しているのは勿論のこと、ある外国の言語、社会、文化に通じながら、日本の言語、社会、文化にも通じ、さらに日本における GLA 共同体の実情を熟知している人」と考えるこ

とができます。その人が、日本で説かれている神理をその国において如何に伝えてゆくのか、また、その国において如何に GLA の場を醸成してゆくのか、青写真にアクセスして実現して頂かなければなりません。そのような人を育まない限り、世界伝道はある段階以上には進まないものと思われま

そうしますと、「世界伝道の青写真」の全貌は見えなくとも、その第一歩は、「日本と外国のかけ橋になる人を募集する」ということで間違いは無いのではないかと考えます。従って、現時点で「世界」に対して発信する内容とは、何よりも「世界伝道にかける願いと志」であり、その志に共感する方々に対して、「日本語を学び、日本に滞在し、日本で神理を学んで母国に持ち帰って頂く」ことを呼びかけることではないでしょうか。

現在発刊されている先生の英語版御著書は、ある意味では、「神理というものはそこまで苦勞して母国に持ち帰るだけの価値があるものなのかどうか」を判断して頂くための介在であると考えられるのではないのでしょうか。

5.3.4 「発信してゆくためのシステム」について

以上のように「地域」「社会」「世界」にそれぞれ広報してゆく内容を考えますと、GLA のホームページを作成するにあたっては、地域のお世話、テーマ別研修、外国人会員のお世話を担われている方々など、多くの方々に関わって頂き、それぞれの部門の方針に基づいて広報してゆく内容の「原案」を作成して頂く必要があるのではないのでしょうか。

そして、これらの「原案」とともに、先生の御講演会、小講演会やシンポジウムなどホームページ以外の社会発信も含めて全体の関係を調整し、社会発信の最終的な責任を担う部門が必要ではないかと思えます。この最終的な責任を担う部門とは、「開けゆくみち」に相違ないものと考えます。それは、GLA の組織態勢を定める「コミュニティ・デザイン 2001」に基づくものです。

GLA 誌 1999 年 11 月号 75～76 ページには、「コミュニティ・デザイン 2001」についての概要が掲載されています。その詳細は開示されていませんが、関本部長によると「一言で言えば、共同体内のコーディネーションの責任を担う部門、そして対社会的発信の責任を担う部門が車の両輪となって、二十一世紀の新しい共同体の形を形成してゆきます」ということです。また、久水講師によ

ると、「開けゆく道が社会的発信を担う拠点として、TL 人間学講座事務局もこのビルの中に入っています」ということですから、「対社会的発信の責任を担う部門」とは「開けゆく道」であると理解することができます。

ここで、対社会的発信の責任を担う部門がなぜ「開けゆく道」であるのかを考えてみたいと思います。私は、「社会発信」の難しさは、「相手（非会員の方々）からなかなか反応が返ってこない」ことではないかと考えます。例えば御講演会の感想シートなどの形で反応を返して下さる方々は、「内容を理解され共感された方々」ばかりであり、「理解できない」「共感できない」と感じられた方々は、ほとんど反応を返して下さらないのではないのでしょうか。このように、感想シートなどから得られる情報はかなり偏った情報であり、「社会発信」については、相手の反応に応じて「先智慧—実行—後智慧」のサイクルを回して内容を改善してゆくことがかなり難しいのではないかと考えます。

一方、開けゆく道では、非会員の方々もメンバーとして参入されるわけですから、主として「対話」という方法によって非会員の方々に神理をお伝えする機会が多くなります。「対話」による場合は、相手が「理解できない」「共感できない」と感じられた場合には、そのような反応を返して下さるわけですから、後智慧して「説明の仕方を改める」という形で対応を取ることができます。

普段からそのような活動を続けていると、「どのような説明の仕方をすれば、非会員の方々から理解・共感を頂けるのか（あるいは頂けないのか）」ということを見極める智慧が育まれてくるのではないのでしょうか。社会発信は、そのような智慧を育んだ方々に担って頂くべきであり、そのような智慧を育める場は、現時点では「開けゆく道」以外にはありません。

従って、GLA のホームページを含めて、GLA 共同体が果たすあらゆる社会発信の最終的な責任を開けゆく道で担って頂かなければならない理由は、正にこの点にあるのではないかと考えます。

6 拠点の充実

6.1 現状の方針案について

「拠点の充実」について、一覧表には、「研鑽・奉仕、お世話、伝道のフロントを担う地域拠点（特にターミナル機能）、そして、それらのはたらきを全体で支え、調整するはたらきを担う総合本部機能を充実する」という全体のテーマが示されています。おそらくこのテーマは、先生から提示して頂いた内容ではないかと推測します。

次に、挑戦1，2として掲げられている「会員分布に応じてターミナル等、地域拠点の整備を行う」「総合本部会館群の整備、その第1着手点は、総合本部会館（現八起ビル）とする」についてですが、これは、「拠点の充実」を「建物の充実」とであると解釈した結果であるように思われます。

先生から頂いたテーマには「機能」という言葉が2回も登場しますので、「拠点の充実」とは「機能の充実」とであると理解することが正しいのではないのでしょうか。勿論、建物を充実させることも大切なことではありますが、「機能を充実させるために建物も充実させる」と理解することが正しいのではないかと考えます。

6.2 新たな方針案

6.2.1 研鑽・奉仕のフロントとしての機能について

まず、「研鑽・奉仕」は「研鑽」と「奉仕」が中点（・）で区切られていることから、これは「研鑽および奉仕」という意味ではなく、両者が一体となった言葉であり、GGPを意味するものと考えられます。地域拠点は、研鑽・奉仕（GGP）に対して、現時点では、「中継会場」としての機能を果たすにとどまっています。研鑽・奉仕のフロントとしての地域拠点の機能をさらに充実させてゆくためには、「地域拠点独自の内容を盛り込む」ということが必要ではないのでしょうか。

特に、地域業に対峙してゆくためには、止観シートの分かち合いは、東京本部から配信される映像を使用するのではなく、その地域拠点で独自に実施して

頂くことが望ましいのではないかと考えられます。また、特に「地域業」ということにこだわらなくとも、普段からよく見知っている方が止観シートの分かち合いをして下さることによって、参加者の方々が「自分ももっと取り組んでみたい」と思って下さるのではないのでしょうか。

ここで、「地域拠点独自の内容を盛り込む」ということは、お世話人の負担にならないように、その地域のお世話人が自由に判断して頂くことが望ましいのではないかと考えられます。すなわち、適当な止観シートの題材があれば地域拠点で分かち合いを実施して頂き、特に適当な題材が見当たらない場合は配信された映像をそのまま放映して頂く、ということでもよろしいのではないかと考えられます。

しかし、地域拠点独自の内容を盛り込むと、「時間のずれ」という問題が生じます。つまり、東京本部では止観シートの分かち合いが終了し、次のプログラムに移っているのに、地域拠点では止観シートの分かち合いがまだ続いている場合にどのように対処するのか、という問題が生じます。逆の場合はそれほど問題が大きくありませんが、空白の時間が生じるのも如何なものかと考えますので、やはり対処できるようにする事が望ましいのではないかと考えられます。

具体的な対処方法を検討しますと、東京本部で撮影された映像を数分程度遅延させて地域拠点で放映するとともに、その遅延時間は地域拠点側の操作によって自由に増減できるようにすることが最適ではないかと考えます。これによって、「時間のずれ」を吸収してプログラムを自然につなげてゆくことができます。

上述のことを実現するために映像を遅延させる機材を各地域拠点に設けるとすると、総額で相当の費用がかかると考えられますので、総合本部の映像配信設備に、それだけの機能を追加して頂くことが現実的ではないかと考えます。

6.2.2 お世話のフロントとしての機能について

次に、「お世話のフロント」ということについて考えてみたいと思います。「グループ力・響働力に基づくお世話」や「止観シート研修」を地域拠点で実施してゆくためには、いくつかのグループが集えるような場所をターミナル内に備えることが望ましいものと考えられます。その意味では「建物を充実してゆ

く」ということも大切なことではないでしょうか。

また、「円環的人生観に基づく魂の一貫したお世話」を果たしてゆくということは、縁友の方に対する過去のお世話の記録や、その方が取り組まれたシート類など、地域拠点においてはこれまで以上に個人情報を取り扱う機会が増えるということになります。

総合本部には、各会員が過去に取り組まれたシート類などの電子データが保存されていますので、お世話の方が個人情報にアクセスするにあたっては、「紙」を媒体にするよりも、これらの電子データに直接アクセスできるほうが望ましいのではないかと考えられます。

すなわち、ご本人の承諾などの手続きを経て、所属本部にて所定の操作を行なうと、これらの電子データを地域拠点の端末から閲覧できるようにすることが望ましいのではないかと考えます。ただ、そのためには、「プライバシーの保護」という観点から、お世話人のみが入室できる部屋を設けるなど、地域拠点におけるセキュリティ面の強化が必要になるのではないかと考えられます。

6.2.3 伝道のフロントとしての機能について

次に、「伝道のフロント」ということについて考えてみたいと思います。これまで、地域拠点では、地域新年の集い、ビデオ会など非会員の方々にも参加して頂ける集いを通じて「伝道のフロント」としての機能を果たしてきました。

しかし、GLA 全体から眺めると、「伝道のフロント」として最大の役割を果たしているのは、高橋佳子先生の御講演会ではないでしょうか。御講演会を開催するにあたっては、全国各地で大きな会場を同日に確保する必要がありますが、それはなかなか大変なことであり、さらに規模を拡大することが難しくなりつつあるのではないのでしょうか。従って、今後、地域拠点は「御講演会の中継会場」としての機能を果たしてゆくことが呼びかけられているのではないかと考えられます。

非会員の方々をお招きする集いは、地域新年の集いやビデオ会などで実績がありますので、課題があるとすると、通信手段ではないかと考えられます。現在、御講演会でメイン会場から中継会場への映像通信は業者に委託しているも

のと思いますが、地域拠点は一拠点あたりの収容人数が少ないため、同じようにすると経費的に割高になってしまうのではないのでしょうか。

また、各地域拠点には、インターネットを経由するブロードバンドの通信環境が整っていますが、これはあくまでも GGP など GLA の内部的な集いに用いられるものであって、「御講演会の中継会場」としての役割を果たすにあたっては、おそらく画質等の面で性能が不十分ではないかと考えます。

高品質な映像を、妥当な経費で全国の地域拠点に配信するためには、「CS 放送の 1 チャンネルを GLA が借り切る」ということが現実的な解決策になるのではないのでしょうか。この場合、総合本部の負担がどの程度になるのか私はよく解りませんが、地域拠点では市販されている CS アンテナ、CS チューナーなどによって、比較的安価に対応できるのではないかと思います。

7 「GLA 千年構想基金」の充実

7.1 現状の方針案について

「GLA 千年構想基金」の充実について、一覧表には、『先生、神理を正しく伝承し、菩薩を生み出し続ける共同体をめざして、「千年の礎づくり」を支える基金の一層の充実を図る』という全体のテーマが示されています。おそらくこのテーマは、先生から提示して頂いた内容ではないかと推測します。

次に、挑戦1として掲げられている「青年の育成基金の創設」についてですが、これは必要なことではないかと考えます。例えば高校生の会員の方で、両親の理解が得られないためにセミナー費用などを負担して頂けない場合があるとお聞きしています。このような場合には、GLA 共同体として、なんらかの支援が必要ではないかと考えます。

次に、挑戦2として掲げられている「各地の学び舎の整備支援と維持管理の推進」についてですが、これは必要であるならば「拠点の充実」のプログラムに含めることではないかと考えます。何れにしても、「GLA 千年構想基金」を充実させてゆくためには、GLA 共同体の「収入が増えること」を挑戦のテーマに掲げなければならず、「支出が増えること」ばかりでは、基金は充実しないものと思われれます。

ここで、『先生、神理を正しく伝承し、菩薩を生み出し続ける共同体をめざして、「千年の礎づくり」を支える基金の一層の充実を図る』という全体のテーマについて、さらに考察を進めてみたいと思います。

このテーマの中の「めざして」という言葉の意味を考えますと、それは基金の充実を図る手段が「単なる手段」で終わってはならず、「先生、神理を正しく伝承し、菩薩を生み出し続ける」という目的に適うものでなければならぬ、という意味ではないかと考えます。

例えば、「挑戦1. 青年の育成基金の創設」については、基金の使い方のみならず、基金の創設のあり方や、充実のあり方についても「先生、神理を正しく伝承し、菩薩を生み出し続ける」という目的に適うものでなければならぬものと考えられます。おそらくこれら全てを実現する青写真が描かれているの

ではないでしょうか。

次に、「基金の一層の充実を図る」ということについて考えてみたいと思います。これまで「GLA 千年構想基金」は、主として会員の皆様の御喜捨により充実を図ってきました。しかし、御喜捨のみに頼るのではなく、GLA 共同体が様々な事業を展開し、収益を上げることによって GLA 千年構想基金を充実してゆく必要があるのではないのでしょうか。

7.2 新たな方針案

7.2.1 青年の育成基金の創設

かねてより、開けゆくみちと青年塾との関係が重視されております。その事の意味を考えますと、「青年の育成基金の創設」に関しては、開けゆく道の皆様の発心によって実現して頂くことが呼びかけられているのではないかと考えられます。具体的な方法については、ぜひ開けゆく道の皆様にて協議して頂ければと考えています。

7.2.2 遺骨をお預かりする事業

人生祈念館において、希望者の遺骨をお預かりする事業について考えてみたいと思います。GLA に遺骨の保管を希望される方に対して「それは遺骨に対する執着であって本来の方法ではない」と思われている方もおられるかもしれませんが、確かに、そのような面が存在することは否めませんが、「遺骨を大切にする」というのは、「故人との関わりを大切にしたい」という「願い」の現れであり、その「願い」については誰しも否定できないことではないでしょうか。

従って、遺骨の保管を希望されている方に対して GLA 共同体が果たすべき使命は、「その願いの現れ方を本来の形に転換できるようにする」ということであり、それによって「先生、神理を正しく伝承し、菩薩を生み出し続ける」という目的が適うのではないのでしょうか。そのような遺骨のお預かりの仕方について、必ず青写真が描かれているのではないかと考えます。

私は、願いの現れ方を本来の形に転換できるようにするための方策とは「特別供養」ではないかと考えます。すなわち、「遺骨をお預かりする」という

ことは「特別供養に参加して頂く」ということとセットであり、遺骨を預けておられる方々に対して、特別供養に参加して頂くことを呼びかけて頂く必要があるのではないのでしょうか。その場合には、料金的な面で工夫が必要かと思われまます。例えば、遺骨の保管料を少し割高に設定しておき、遺骨の保管を委託された方に限って特別供養の費用をその分だけ廉価にすると如何かと考えまます。

7.2.3 出版事業

GLA 千年構想基金を充実させる事業の一つとして、「出版事業」を掲げることが呼びかけられているのではないかと思われまます。すなわち、弟子が書籍を編纂・販売し、その収益によって GLA 千年構想基金を充実させる、ということです。

弟子が編纂する書籍として特に重視すべきと思われまますのは、特定の読者層をターゲットにしてテーマを特化した書籍です。それらのテーマとは、例えば、「中小企業を如何に活性化させるか」、「教育者としていわゆる問題児と如何に向き合うか」、「難病に罹った後、残りの人生を如何に生きるか」などです。

これらのテーマは、高橋佳子先生の御著書の随所に、御指導として、また弟子の実践報告として反映されています。しかし、先生の御著書は「どなたにでもお奨めできる」という特徴を維持する必要があるのではないかと思われまますので、今後とも特定のテーマに特化した御著書を執筆されることは予定されていないのではないかと思われまます。従って、特定のテーマに特化した書籍は、弟子が編纂することが呼びかけられているのではないのでしょうか。

以上